

## Aちゃんのこと

### 伊集院理子

四月に入園してきた年中児Aちゃんは、私と目があうと、照れくさそうにニコニコと笑う表情がとても印象的な子どもでした。くせのないやさしいその笑いに、私は、何色にも染まっていけない透明な心を感じました。Aちゃんは、はじめて体験する集団生活を、ニコニコしながらお友達の様子を見たり、私の後についてまわったりすることからスタートしました。そのうち、自分のやりたいことを見つけ、ある時は、活発な男の子に一人交じって砂場遊びをしたり、ある時は、他の女の子がするのを見てお面をつくったり、ある時は、お山でたくさんの

お友達とかくれんぼをしたりと、ごく自然な形で、自分の世界、お友達との関係をひろげ、園生活にもなじんでいった頃のことです。

新米保育者の私は、六月の末に実習生を迎え、大人の手がある時に粘土をだしてみました。Aちゃんを含めた数人の子は、その日は粘土をやるうとしませんでした。次の日の朝、Aちゃんは、泣きながらお母さんに引っぱられるように登園してきました。そして、これまでうまくいっていた母との別れが、突如としてこの日からスムーズにできなくなりました。お母さまに事情を伺うと、昨日「Aちゃんは粘土をしないの？」と言ったのがいけなかったのでは……ということでした。お母さまのたった一言が、Aちゃんの中で、自分の思う通りにしている良い所として定着しつつあった幼稚園のイメージを「何かをしなければいけない所」に変えてしまったのではないか。「何かをしなければいけない所」となった幼稚園は、Aちゃんには、圧力を持ってとらえられ、その圧力は、幼稚園生活に素直に開きだしていたAちゃんの心に

囲いをつくってしまったのではないか、と考えました。

いったんそういう形で囲いをつくってしまうと、粘土なら粘土という課題だけではなく、自然にとけこんでいた友達との関係にも自分から溝をつくってしまい、それを回復するきっかけがつかめず、絵を描いているお友達の後からその頭をクチャクチャと触って歩くというような突飛な行動が見られたりもしました。粘土をだして三日目、Aちゃんは、意を決したように粘土に触って、短い時間でしたが、こねて何かをつくろうとしていました。その日の帰り、お母さまにAちゃんをお渡しする時、自分から「Aちゃん、粘土やったよ」と報告してニコッと笑いました。

それでも、まだ、朝、母とスムーズに別れられない日が続いていました。

どうしても手がある時に絵の具もやっておきたいという、こちらの都合で、粘土を三日した次の日、絵の具を出しました。その日、私が筆を洗っているのを見て、「Aちゃん、手伝ってあげる」と言って、筆を洗う手伝

いをしてくれました。次の日も筆洗いをせせとしてくれました。その次の日、絵の具をしたい子が一通り描き終ったあと、テーブルの上にしてある新聞紙の上にごっそりと筆で描き始めました。私は、じっとその様子を見守っていました。少しして、自分から、「白い紙ちょうだい」と言ってきて、集中してダイナミックな絵を二枚描きました。次の日から、Aちゃんは、前のようにお母さんと別れられるようになりました。

この一連のAちゃんの行動は、自分からやりたいと思う機が熟するのを待つことの大切さ、そして、自然な形でそれぞれの子どもが機を熟するようにするために、その日限りではなく、日々の保育を継続的に展開していくことの大切さを教えてくれました。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)